

永遠の
レッス
ン

Azamino Photo Annual 2023

Ushioda Tokuko: *Lifelong Learning*

あざみ野フォト・アニュアル 2023

潮田
登久子
写真展



あざみ野 フォト・アニュアル

あざみ野フォト・アニュアル2023

潮田登久子 写真展 永遠のレッスン

2023年1月28日[土] – 2月26日[日]

横浜市民ギャラリーあざみ野 展示室1

開場時間 10:00–18:00 会期中無休 入場無料

主催 横浜市民ギャラリーあざみ野〔公益財団法人横浜市芸術文化振興財団〕

協力 PGI、株式会社ライブアートブックス、城西国際大学メディア学部

Azamino Photo Annual 2023

Ushioda Tokuko: *Lifelong Learning*

January 28 [Sat] – February 26 [Sun], 2023

Yokohama Civic Art Gallery Azamino [Gallery 1]

Opening Hours: 10:00–18:00

Admission Free

Organized by Yokohama Civic Art Gallery Azamino (Yokohama Arts Foundation)

In Cooperation with PGI, LIVE ART BOOKS Inc., Faculty of Media Studies, Josai International University

この展覧会のためにご協力いただきました方々に深く感謝の意を表します。(敬省略)

We would like to express our deepest gratitude to all those who have contributed to this exhibition. (Honorifics omitted)

潮田 登久子 Ushioda Tokuko
島尾 伸三 Shimao Shinzo

高橋 朗 Takahashi Sayaka
小川 貴之 Ogawa Takayuki

PGI PGI
有限会社フォトグラファーズ・ラボラトリー Photographers Laboratories Ltd.

凡例

- ・シリーズタイトルと共に記した年代は、シリーズの撮影年代である。
- ・掲載図版のデータは巻末の作品リストにまとめた。
- ・図版に付した番号は巻末の作品リストと一致する。

現代の写真表現を紹介する「あざみ野フォト・アニュアル」企画展では、静物を中心に端正なモノクロ写真を撮影する写真家、潮田登久子（うしおだ・とくこ／1940年東京都生まれ）の個展を開催します。

潮田は、1960年に桑沢デザイン研究所に入学し、写真家の石元泰博（1921–2012）、大辻清司（1923–2001）の指導を受け、1975年にフリーランスの写真家として活動を始めます。1981年より、さまざまな家庭の冷蔵庫の外観と庫内を定点観察するように撮影を始め、『冷蔵庫／ICE BOX』（1996）を出版。1995年より、本と本の置かれている環境を主題とした「本の景色／BIBLIOTHECAシリーズ」の撮影に取り組み、『みすず書房旧社屋』（2016）、『先生のアトリエ』（2017）、『本の景色』（2017）の三部作として発表しました。それらの業績が認められ、2018年に、第37回土門拳賞、日本写真協会賞作家賞、第34回写真の町東川賞国内作家賞を受賞。2019年5月に桑沢特別賞を受賞しました。2022年2月には、約40年前の未発表作をまとめた写真集『マイハズバンド』を刊行し、同年11月に「Paris Photo–Aperture PhotoBook Awards」審査員特別賞を受賞。この写真集に収録されているのは、写真家である夫・島尾伸三と、当時幼かった娘（しまおまほ／作家）とともに生活した、世田谷区豪徳寺の歴史ある洋館で撮影された写真です。

本展では、およそ45年ぶりに公開される初期作品「街へ」（発表当時のシリーズタイトルは「微笑みの手錠」）をはじめ、代表作である「冷蔵庫／ICE BOX」、「本の景色／BIBLIOTHECAシリーズ」三部作、そして「マイハズバンド」のシリーズなどをご紹介します。活動を始めてから現在に至るまで、途切れることなく撮り続けた、潮田による写真をこの機会にぜひご堪能ください。

最後に、本展を開催するにあたり、出品作家と様々なご協力をいただきましたすべての関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

横浜市民ギャラリーあざみ野

Every year, Azamino Photo Annual has proudly brought contemporary photography to public view. In this edition, we present the photographs of Ushioda Tokuko (b. 1940) who is best known for her quiet black and white still life works.

Ushioda enrolled in Kuwasawa Design School in 1960, where she studied with photographers Ishimoto Yasuhiro and Ōtsuji Kiyoji. In 1975, Ushioda started work as a freelance photographer, and in 1981, began photographing refrigerators in Japanese homes in a diptych format with the doors opened and closed. This culminated in the publication *ICE BOX* (1996).

In 1995, Ushioda began photographing books in their natural settings. These photographs were published as a three volume series entitled *BIBLIOTHECA*: consisting of *Images nostalgiques de l'éditeur Misuzu*; *My Teacher's Atelier*; and *Bibliotheca*.

In response to the *BIBLIOTHECA* trilogy, Ushioda received three awards in 2018: the 37th Domon Ken Award; the 34th Higashikawa Award of Photography; and the 2018 Photographic Society of Japan Award, and the following year, Ushioda also received the 2019 Kuwasawa Special Award by the Kuwasawa Design School.

Most recently, in February 2022, Ushioda published *My Husband*, which takes her husband, Shimao Shinzo, also a photographer, as its main subject, and chronicles their family life in a historic Western-style house in Gotokuji, Tokyo, with their then-newborn daughter Shimao Maho, now also an artist. This project was prompted by the rediscovery of Ushioda's prints and negatives after forty years, and presents her heretofore unseen work from that early period. This publication earned Ushioda the Paris Photo–Aperture PhotoBook Awards Jurors' Special Mention in November 2022.

In this exhibition, we present a selection of photographs including those from Ushioda's earliest series *Machi-e/ Heading Into Town* (originally titled *Hoboemi no tejō / Handcuffed by a smile*), which will be on display for the first time in forty-five years, along with the acclaimed series *ICE BOX*, *BIBLIOTHECA*, and *My Husband*.

We are pleased to show the long arc of Ushioda's career thus far, and would like to express our deep gratitude to the artist and the many individuals who have provided invaluable support in making this exhibition possible.

Yokohama Civic Art Gallery Azamino

2019年3月、部屋の片付けをしていたら、1976年10月に新宿ニコンサロンの写真展で展示したプリントのかたまりが、古い洋服ダンスの奥から出て来ました。厚手の台紙にドライマウントで貼付けたプリントの表面に黴らしきものが発生していて、年月を感じさせられました。その写真展に『微笑みの手錠』という情緒的なタイトルにしてしまったことなど、懐かしさだけではない居心地の悪さはどこから来るのか、私は溜め息をついてしまいました。

街へ出て、知らない人に声をかけ、自分が何者であるかを伝え、了解を得たら撮影させてもらうという課題が、石元泰博（いしもと やすひろ）先生から出されたのは、桑沢デザイン研究所リビングデザイン科に入ったばかりの頃でした。街行く人に声を掛けるのは勇気が要りましたが、銀座、上野、浅草、新宿へと行き先が広がり、人の集まる場所にせっせと通いました。撮影のコツを手の内に入れる程に、それが武器となり獲物を追いかけるものなのかも知れないという疑問が気持ちのどこかに芽生えたのでした。

景色を眼の中に無理矢理に入れようとしている夢を見るなど、行き詰まりかけている自分に気付く時代でもありました。

潮田登久子



007



004



002



006



001



011



008

1978年、長女を出産した潮田は、家族3人での生活を、世田谷区豪徳寺に移築された明治時代の洋館(旧尾崎行雄邸)の2階の一室からはじめた。広さ約15畳、天井高3メートル余りの立方体の箱のような空間。そこには、写真家である夫・島尾伸三が買ってきた進駐軍払下げのスウェーデン製の白い冷蔵庫が置かれていた。

当時潮田は、自分の生活を記録に留めておこうと室内のものを撮っていたが、冷蔵庫もその一つだった。1981年頃から人の生活を映し出す冷蔵庫に関心を持ってこのシリーズに着手し、2003年頃まで撮り続けた。カメラを正面から構え画面上の歪みを少なくし、冷蔵庫内と外観を定点観察するように記録した。ささやかな生活の記録としての撮影は、家族や親せき、大家さん、友人宅の冷蔵庫と次々に撮影の機会を得、広がりをもっていった。初発表は1992年 Gallery さくら組(東京・渋谷)。





022



022



052



052



014



014



038



038

60年をこえる潮田登久子の写真制作を、初めて見渡すことができる機会である。6つのシリーズに絞り切り、潮田は写真家としての態度を示す。各章のシリーズは何年もかけて、ときには10年単位で撮り続けられ、写真集にまとめた後も継続中のものもある。急がずに積み重ね、年齢を重ねるほどに確固たる自分の世界を広げて、モノクローム写真の醍醐味を見せてくれる。潮田は写真男性社会をどのようにやり過ぎて、この地点に立てたのだろうか。

潮田が師と呼び、本展出品作「先生のアトリエ」シリーズにも不在の“先生”として登場する大辻清司(1923–2001)は、作品発表をほとんど行わなかった。それは大辻が写真というメディアの特性を考え詰めて、写真が作品として成立するとはどういうことか、自問を繰り返したからだだったと思われる。潮田はもちろんそのことを理解していた。彼女が写真に問いかけながら制作するうちに、手応えを確かめ得た作品だけを、今回の初回顧展で見ることができる。

50年近く封印されていた初期作品「街へ」は、大量のショットから厳選されている。初個展のタイトル「微笑みの手錠」は、女性が社会エチケットでまとう意味のない微笑を手錠に見立てた言葉だった。登場する女性たちは手錠をはずしつつあるように見えないだろうか。街で丁寧にあいさつしながらスナップを続けたという潮田は、出会う女性たちを背景を持つその人個人として撮って、典型化させない。彼女たちと目をあわせながら、強い視覚効果のスナップに撮りため

た。見世物小屋の女性たちが休憩中に見せる素顔は、わたしには安井仲治(1914–1942)の「曲馬団」シリーズを思い出させる(fig. 1)。安井はリアルな物質感と個の尊厳とともに街の労働者や子供たちを写した。潮田がまず芸人一座や見世物小屋にひきつけられたのはなぜだっただろう。その理由がこの章の基盤をなしているのだと思う。

ここから大きく転換し、15年ほどを経て潮田の出世作「冷蔵庫」シリーズが発表された。個人宅の冷蔵庫を、扉を閉じた状態と開いた状態の2枚で提示するフォーマットで、正面から淡々と撮影してある。冷蔵庫への着眼は、置いてある場所も含めて、まさに個人的密室空間の開封だった。無機的フォルムのフレームに、千差万別に個性的、静物が人物以上に人間臭く、あからさまにストーリーが溢れる。持ち主の生活も、撮影までの写真家とのやり取りも想像させずにおかない。手法はシンプルなパターンでも、写真は過激だ。過激なのは被写体だけでなく、撮影者の冷静な過激さこそシリーズの魅力である。

2000年代、還暦を迎えていよいよ「本の景色」の発表にとりかかる。本を独立した一個のモノととらえた、モノのポートレートだ。「冷蔵庫」は持ち主のポートレートに似ていたが、古い本は歴史を背負ってヒトよりも威厳と複雑な人格を備える。本の作り手、保存の担当者、保管の場所、それらがすべて時を得た書物を存在させる要素になって写り込んでくる。まずは正対して本を見ていた撮影者も、手すりの端や脚立

の上、開いて持ってもらうなど、本の個性に合わせて、本と手合わせをする。多くの写真賞をさらって、今もなお継続中のシリーズである。

「マイハズバンド」は40年の封印を解いた最新作。新たなセクションを得て、昨年出版された同写真集とは異なる印象になった。夫・島尾伸三の存在感が前面に出て、撮影者と切り結ぶ緊張と葛藤が鮮烈だ。長身の島尾の多面的な表情は重く響き、人気のない部屋にも日用品のあれこれに強く体臭がこもる。撮影期間が「街へ」と「冷蔵庫」のあいだにあったことを改めて納得させられた。潮田は家人を相手に「街へ」を続け、自室で「冷蔵庫」にも出会っていたのだ。潮田の「私写真」はフェイクではない、自分の場所そのものに切り込んだ。

さて、潮田はいかなる写真家なのか、何らかの系譜に彼女が分類されたことはほとんどない。簡単なレッテルを貼っても、もちろん跳ね返される。

1940年生まれの潮田は、森山大道と同年である。ロバート・フランクの写真集を繰り返し見た体験は彼と共通していても、決してブレたりボケたりしない潮田は『プロヴォーク』に「全く興味はなかった」と言う。写真の可能性を逆説的に刹那的スピードと情動的な動感に向けて開いた森山たちの方向は、確かに潮田の求めるものと正反対といえそうだ。

大辻の周囲で、同世代の新倉孝雄(1939–)の写真にシンパシーを抱き、学生の頃から注目した牛腸茂雄(1946–83)の作品を見守っていた潮田は、大辻の助手や東京造形大学講師を勤めたのち、1975年からフリーとなって個人の活動を本格化させた。この時期の「街へ」を、新倉や牛腸らが代表する「コンボラ写真」に含めるのは無理がある。街の人物スナップで共通点もありながら、繊細で都会的な感覚のコンボラ写真と異質なのは、かすかに土俗的に女性の顔を読み取って社会性に迫らんとする、個人性を超えた写真家の強さではなかったか。

1980年代に入ると、作家は街での撮影をやめた。出産や子育てはひとつの要因だが、何より街が変わったのだと言う。高度成長期の活気、アングラ志向、新左翼運動の残香、それらが消え去った街で、これまでのスナップを継続するのは不具合だった。

一方で、自主ギャラリー運動が盛んになってくる。『インディペンデント・フォトグラファーズ・イン・

ジャパン 1976–83』(1989、東京書籍)のタイトルに注目しよう。ちょうど潮田の初個展(新宿ニコンサロン)の年から始まっている。この本では、写真制作が職業(ジャーナリズム、ファッション、広告等)になり得ず、「写真家であるためのステイタスは、経済性とはまったく無縁の精神性のなかで守られつづけてゆくことになるのである」との立場から、カメラをもった若者たちが自由な発表の場を求めて、自分たちのギャラリーをグループで運営する、全国的な写真運動を記録している。

同書に潮田の作品は掲載されていない。細かく見ると、筑波大の教授だった大辻が自主グループ「CAMERA WORKS」(1978–84)に声をかけて同大で開催した「15 contemporary photographic expressions」展第1回(1982)に潮田が出品したことが記されていた。CAMERA WORKSは、小冊子の発行、展覧会企画を行っていた。そのひとつ「ポール・ストランド THE MEXICAN PORTFOLIO」展(1981)で、彼らは潮田が敬愛する写真家を探りあげた。金子隆一の企画で、築地仁、夫君の島尾伸三もメンバーだった。CAMERA WORKS、そして自主ギャラリー運動に、潮田は近くとも外部にいて、距離を保っていたようだ。ストランド(1890–1976)は洗練された造形力と描写力に、決して説明的でない直截な社会性をストレートなポートレートで示して注目された巨匠。彼がスコットランドの島を撮った『LES HEBRIDES』(1954)は潮田の教科書なのだろう*。

さて、「コンセプト・フォト」の語が同書に登場するのは、潮田も出品したことのあるギャラリーOWL(1979–1981)の記述中だった。1960年代後半からコンセプト・アートの文脈の中で写真を使った美術作品が台頭する。「コンセプト・フォト」は潮田に関係があるだろうか。例えばベッヒャー夫妻の手法を潮田の「冷蔵庫」や「本の景色」と比べられるだろうか。シンプルなフォーマットの採用と撮影対象を定めている点には共通点があるものの、両者の写真は全く別である。タイポロジーは無用で、潮田が写したいのは対象の本質だ。モノの奥にストーリーと社会性が広がる写真。ずばりと刺す、なのにチャーミングで人間味のある写真。

*潮田登久子「私に写真を撮る理由を教えてください」2004年3月、『木野評論』VOL35, 196–202p



fig. 1: 安井仲治《タイトル不詳》1940

みすず書房は、戦後間もない1946年3月に創業した東京の出版社。『ロマン・ロラン全集』全43巻、『現代史資料』全45巻などのほか、発行書は人文科学、社会科学、自然科学、文学、芸術など、ほぼ文化の全領域にわたる。

撮影の舞台となったのは、1948年11月から1996年まで48年間、文京区春木町（現・本郷3丁目）にあった木造の旧社屋。数々の本が生み出されたその社屋が取り壊されると聞いた潮田は、建物の外観や、内部の書庫、編集室、編集部員たちと編集会議の様子、建物解体直前のがらんとした部屋などを写真に収めた。撮影は、1995年11月から1996年8月5日まで、約10か月にわたり行われた。

本展では、プリントの展示と並び、建物が解体され更地になるまでの全掲載写真（写真集『みすず書房旧社屋』所収）データを、掲載の順（時系列）に並べてプロジェクターでループ再生している。



059



056

「贗かいせつ モルタルの階段、木の階段」

鬼海 弘雄

...

はじめて、みすず書房を訪ねたのは1991年。当時の編集長の加藤敬事さんにインドの写真を観てもらいに行ったからだ。友人の尾方邦雄さんから届いた手書きの地図を頼りに「社屋」（潮田さんが撮られた建物）を探した。たどり着いた角地に古い二階木造家屋が建っていた。屋根の一角に物干し台まで載っていた。みすず書房の知的で清楚な書籍のイメージとはかけ離れていた。八手の植わった傍の合板のドアを開けると、上がり框からくすんだ木の階段が二階につづいていた。

通された編集長室は細長い部屋で生家の母屋と小屋を繋ぐ納戸と似ていた。村の医者が座っていたような布張りの回転椅子の加藤さんは、プリントを三十枚ほど捲っただけで、ぼそっと、出しましょうと言った。嗚呼。



060



061



057

それまでに幾つかの出版社を廻っていた。写真表現に「好意的」な編集者たちからも「営業」が首を縦に振らないと、いつも目を合わせずに引導を渡されていた。

奇妙な編集長室から廊下を隔てた板張り部屋では、カジュアルな装いの編集者たちが机を並べていた。誰もが会社然としていなかったので正規の道を歩いたことの無い写真家にも親しみを覚えた。

『INDIA』を作ってもらってから、よく編集部に遊びに行くようになった。夕方になると隣の酒屋からビールを買ってきては飲み会になった。いつも、辻井忠男さん、尾方さん、守田省吾さんが一緒だった。そして、栗山雅子さんが帰った後は近くの居酒屋へと繰り出した。終電車を逃した真夏には、揃って編集部に戻っては椅子の隙間の板の間に直に横になって何度も朝を迎えた。

みすず書房でのわたしの二冊目の『や・ちまた』も、あの応接間で辻井さんと尾方さんに編集してもらった。その前年に阪神・淡路大震災もあったので、それから僅かしてみすず書房は本郷五丁目に移転した。すでにあれから二十年が経っている……。

...

潮田さんのこの写真集を開くと、わたしにはあの当時の時代がぬ〜っと甦ってきて咽せる。あの社屋を知らない読者にも、この精緻に撮られた写真はそれぞれの物が付喪神になって、時代への想像力を増幅させゆらゆらと揺らすにちがいない。

...

(鬼海弘雄「賈かいせつ モルタルの階段、木の階段」潮田登久子著『みすず書房旧社屋』pp. 80-84、幻戯書房、2016年より一部抜粋)

写真家 大辻清司（1923-2001）は、潮田の桑沢デザイン研究所時代の恩師である。代々木上原にある大辻の自宅には、卒業生や教え子たちがよく集まって、熱気に満ちた時間を過ごしていたという。1976年にコンクリート2階建てに建て替えられ、路面から50センチほど低い半地下のような1階が大辻のアトリエだった。潮田は、大辻の没後約4年を経てこの場所の撮影に赴いた。

室内に残された数多くの道具や、ガラス瓶に詰め込まれたパーツ類、小型飛行機や列車の模型、書籍、カメラやフィルム、プリント類、人類初の月面着陸を報じる新聞各紙、『LIFE』誌の朽ちかけた塊など、「モノ」の凝視から出発した写真家として知られる亡き師のアトリエに残された数多くのものを、潮田は冷静な観察と親密さをもって捉えている。



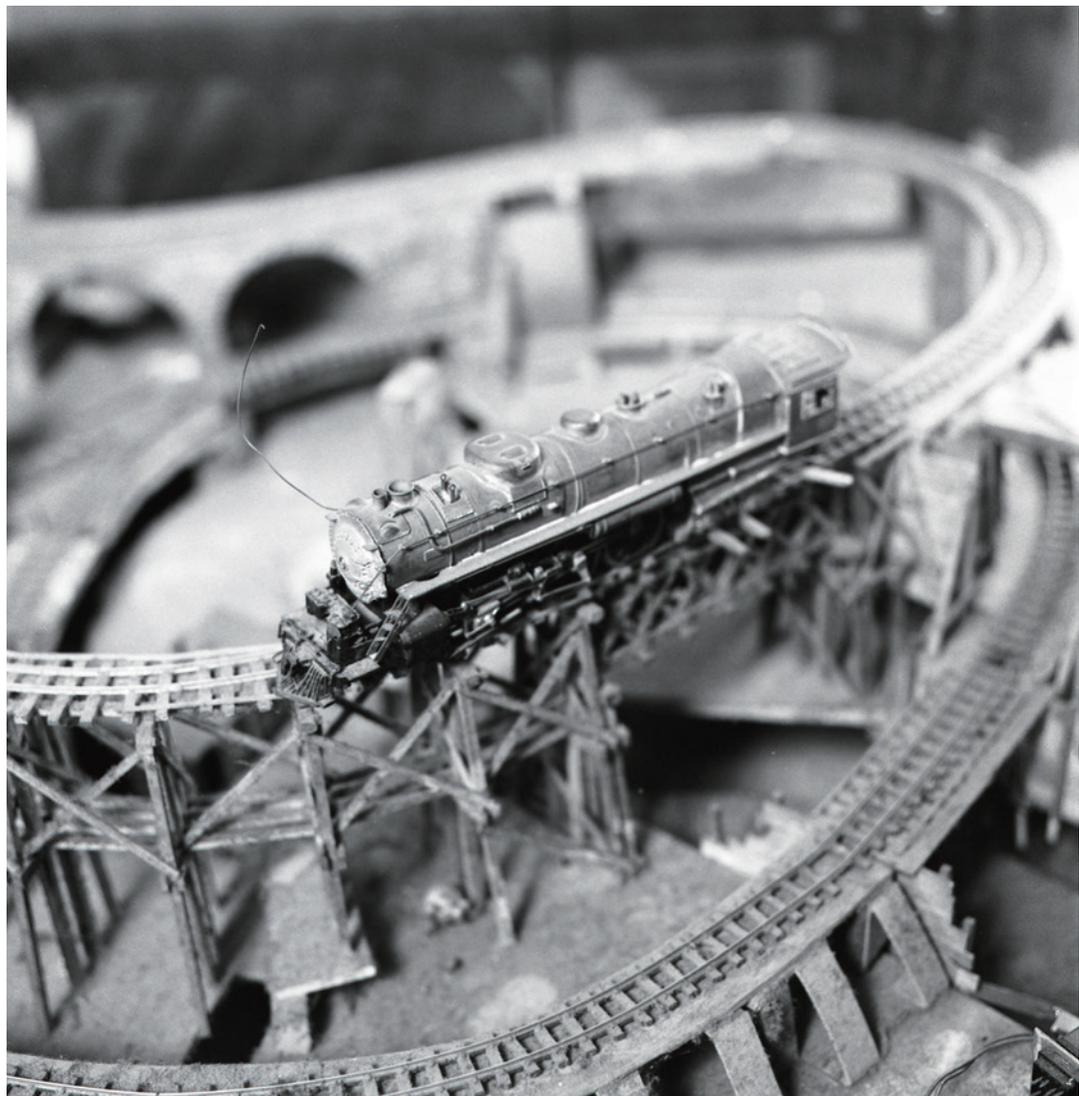
064



071



067



066

撮影のきっかけとなったのは、誰も居なくなったみすず書房旧社屋に取り残された一冊の本（丸山真男著『戦中と戦後の間』）。その美しさに惹かれ、オブジェとして本のたたずまいを撮ってみたいと思ったことから、1995年頃から国立国会図書館修復室、大学図書館の貴重書庫、古書店などを訪ね、撮影を続けてきた。図書館の書庫の中も、自然光の差し込むアトリエも、すべてその場所の光の環境で撮影している。

潮田は、写真集『本の景色』（2017年）の図版解説として、2021年に制作した『本の景色 撮影ノート』に、「モノ」として撮るだけで良いのかという迷いが常に頭の片隅にありながら、撮影を止めることにならなかったのは、“本”の持つ不思議な力に引き寄せられてのことかもしれない」と記している。

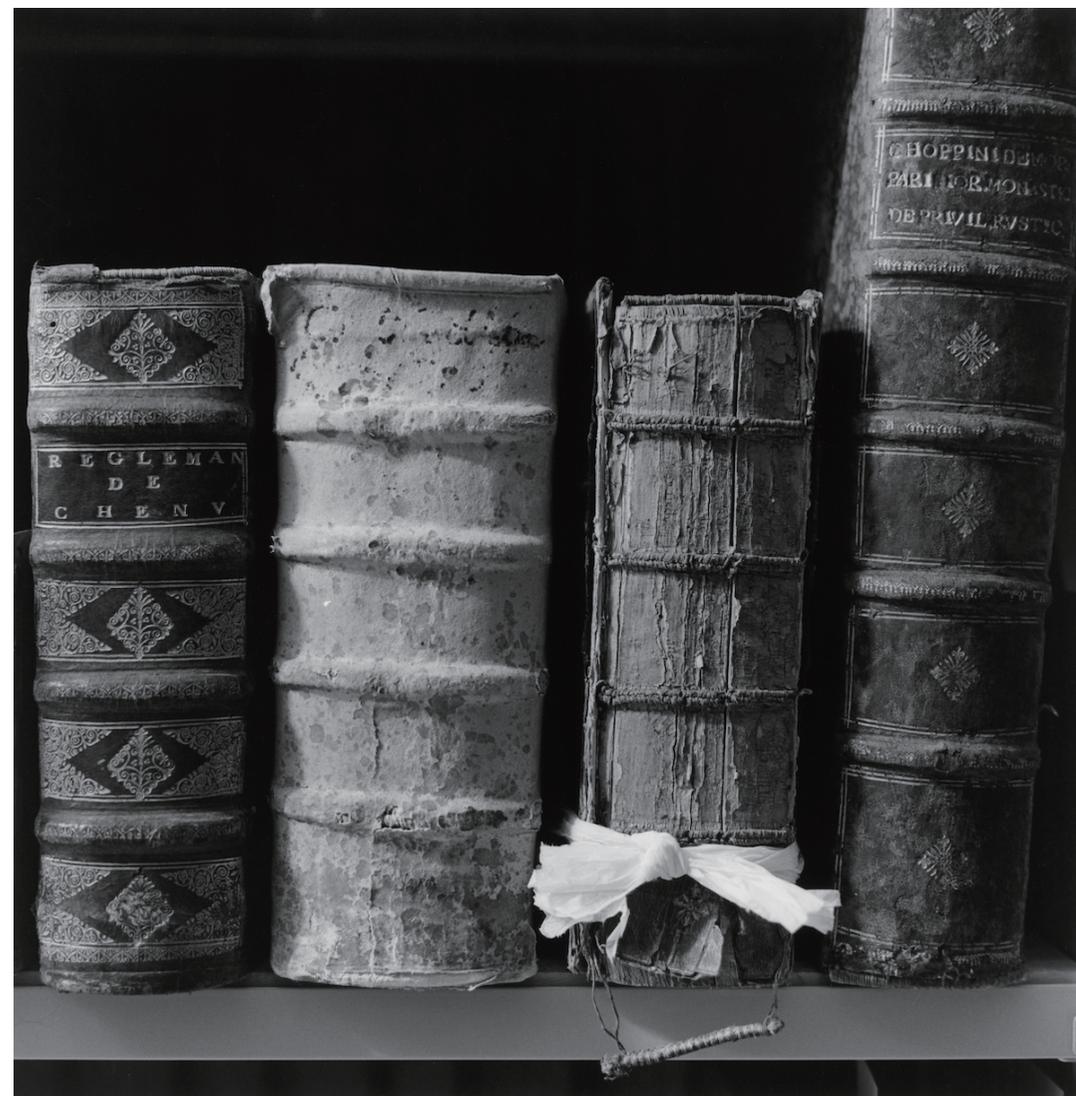
本展では、『本の景色 撮影ノート』に掲載がある展示作品には抜粋文を、新作には新たに解説文を付した。



084



075



074



092



082



080

撮影期間は、長女が生まれた1978年から、小学校に入学する頃までのおよそ6年間。撮影場所は、一家の住まいである世田谷区豪徳寺の洋館の2階の一室だった。目的を定めず、日常の記録として身の回りのものにシャッターを押した。撮影にはゼンザプロニカS2や35mmフィルムを使う一眼レフカメラ（ニコンF）が使用されている。

2020年に洋館の取り壊しが決まり（※その後解体は撤回）、そこに保管していたさまざまな生活用品や中国旅行で集めた雑貨などを整理すると、40年あまり公開されることのなかったプリントと、6×6、35mmのネガの束などが見つかった。それらのうち、表紙を含む156点によって編まれたのが写真集『マイハズバンド』（2022年）である。

夫・島尾伸三と娘・まほの姿や、一家を取り巻く賑やかな生活の情景はもとより、建物の特徴である南向きの大きな窓や急な階段が写されている。また、家族がいない室内の様子を捉えたカットが多いのも特徴である。





108



096



116



103

「冷蔵庫」や「本」など、モノを撮影すること

て撮っているだけではね。はじめは疑問を持ちながら「こんなのやってもしょうがない」と思うこともありましたが、「これでやってもいいんだ」と思えることが何回もあり、続けている意味があると思いました。だから最近になって神奈川県立図書館でも撮らせてくださるというのは、ありがたいです。やっぱりもっと撮りたくなるような本にぶつかるので、面白いです。

「モノには、どんなつまらないモノにも、物語がある」と鳥尾に言われ、「そうだな」と気がついた時に、モノを撮ることに躊躇がなくなりました。ただ自分の気に入ったモノを撮るだけでは、広がりがないです。モノを凝視するというか、私なりのセンスでモノを見るということが面白くなったというのは、すごく気持ちを楽にさせてくれました。

みずず書房旧社屋で撮影した時に、丸山真男の『戦中と戦後の間』という本が、がらんとした棚に置き忘れられたようにあって、「綺麗な本だな」と思ってね。何か、美しい建築物のようにも見えたんです。それが本を撮りはじめるきっかけになりました。でも、こんなこと言っ、みんなに笑われるからと、ずっと言えなかったんですけど、それでも、やってみようと思ってやり始めたんです。できっこないと思っていたことでもやり続けていると、私なりに見つけることができてね。

私は、そのモノの存在感と、社会と時代とかが見えて来ないと、撮りたくならないんです。桑沢で先生に街で写真を撮る前に、テクスチャーだとか、素材を撮ることを教えてもらったということもあります。写真集『帽子／HATS』などでもその素材感を活かすように撮ったりしてきましたが、そこでレッスンをするとかね。モノを撮る、その楽しさを見つけたというのは、私の次のステップに行く大事な要素でもありました。それは今も続いています。

おしゃれにしようとしたんだと思うんですね。けれど、ストレートに、街に出て行って写真を撮る、という「街へ」に変えた方がいい。それは最近思い始めたんです。これらの写真は捨てようと思っていたんですが、鳥尾が引越したりする時に「捨てるな」と、言っていたんです。私は「どうでもいいわ、じゃあ適当に」と。それでとっておいた写真が「マイハズバンド」だとか、結婚する前の写真です。その頃の写真は、本当は見たくもなかったんですね。「見え透いたことをやってるな」という感じでね、封印したかったんです。だけど、やっぱりもう一回見て、大事だということに最近気がついた。そうしたことあって、「街へ」のほろがすなり、写真らしい解釈ができるような感じもしましたし、私も納得がいったので今回改題しました。

写真をはじめから60年以上になるんですね。今になってもまだやっているというのはどういうことなのかというのを、ずっと疑問に思っていたんです。石元先生の授業で知らない人に声を掛けることから始まって、少しずつ場を広げていったんです。それだけのことなんですよ。そうやってレッスンして、自分で撮りたいもの見つけて、それが今へとつながってきました。

潮田家の菩提寺の隣のお寺に『解体新書』の杉田玄白のお墓があるんです。不思議な縁だなと思って、急いでお線香をあげに行きました。本を「モノ」として撮るというのは、遊びみたいなものすけれど、でも、本の世界は幅広く奥深いですよ。だから、あまり自分で垣根をつくらずに、と思っています。早稲田や国会図書館では、今考えたらとてもできないような、もし研究者や司書の人たちが見ていたら、ハラハラするようなこともあったかもしれませんが、全部一人で責任を持つと思ってやっていますから、疲れるけれど大変面白いです。今回の撮影では、プロニカってめちゃくちゃ重いんですよ。だから助手（夫・鳥尾伸三）をこき使って（笑）それと、私の撮り方は、ああいう感じですが、どんな本であるかを知りたいかなんてなくて、色んなものを鳥尾に助けてもらって、調べるのを楽しんでくれていますから。モノとしてだけではなくて、中身も知りたくなるという、その取っ掛かりを作ってくれるので、とても安心できます。ただ面白がっ

ほとんどまともな会話はしていなかったと思います。私はそこにいただけだった。

それはもう、ロバート・フランクですね。その後のコンテンポラリー・フォトグラファーズの一連の写真にはピンとこなくて。フランクの写真が、何が良いというのではなく、先生のお宅でみんなで見たとあの熱気を今でも覚えています。高梨豊さんがいて、新倉孝雄さんがいて、他にも同じクラスの人たちがみんな、顔つきあわせて覗いている姿を、何も知らない私はその後ろから見ていただけなんです。一緒に仲間に入れてもらって。学生たちの膝の上には大辻先生の子どもが座っていたりする、茶の間のようなところで、みんなでポロポロになるまでその写真集を眺めていました。

初めての写真展は、新宿のニコンサロンで展示した「微笑みの手錠」というもので、1976年10月だったと思います。

その後、鳥尾と一緒にあって、がらんと生活が変わりました。ちょうどその頃、私は人間を撮るのをずっと面白がってやっていたけれど、何か疑問を感じるようになりました。はじめは標準レンズで、それから広角レンズを使い始めたんですが、古いライカに28mmのレンズを付けて、撮りたい人を見つけるとその人に向かって突き進んでいった。28mmだから、かなり近くに寄って写真を撮る。そういうふうにして撮らせてもらったら、面白いんですね。上手に撮れるようになって、余計な背景もうまく処理できているし、人間もちゃんとシャープに撮れているんだけど、カメラを武器にしているような気持ちになってきたんです。人間の撮り方も意地悪な眼とか。カメラは、良いようにも悪いようにも作用するものだということを感じ始めたんです。そうすると、躊躇する場面が多くなって、でも写真は撮らなきゃいけないという無理な気持ちが出てきて、本当にやっている意味があるのかなど。街に出てもどこか気持ちが引いているし、あまり撮りたいものが無くなったとか。何か批判的な、流行りの写真の真似をしてみたりしたこともありましたが、やっぱり違うと思いました。子どももできたし、ちょっとお休みするという感じでした。

いかにもありがちな、それだけで意味があるような題名にした、というのが前々から気になっていたんです。当時は何か文学的な要素を入れるような、写真ではなくて、何かちょっと違った要素を、

学生時代に影響を受けた写真家

街て人物を撮影する面白さと難しさ

「微笑みの手錠」を「街へ」と改題した理由

私は、東京生まれ東京育ちで、私立の女子中・高・短大と通いました。卒業して花嫁修業を始めるような時代でしたが、もう少し遊びたいなと思ったのと、もう少し何かやりたいなと思い、桑沢デザイン研究所リビングデザイン科に入って勉強しました。デザイナーになるためのデザインの基礎科目のなかに写真の授業があり、そこで写真家の石元泰博先生に出会い、教えを受けました。

石元先生の授業では、デザイナーになるための基礎の写真の色々やりましたが、渋谷の街に出て知らない人に声を掛けて撮らせてもらう、という課題が出ました。それまでカメラを触ったこともなく、持っていなかったものですから、仲の良い同級生の叔母さんが横浜高島屋デパートにつてがあるからと、カメラ売り場で標準レンズが付いた一眼レフを買いました。それで渋谷の街に出て人に声を掛けて、自分が何者であるかを名乗り、写真を撮りました。渋谷のハチ公のあたりですね。近くに交番があり、その前だったら怪しまれないだろうという作戦もありました。でも、知らない人に声を掛けて撮るというのは、かなり勇気がいることでした。許可がもらえたり、断られたりしているうちに、少しずつ他の街に行くようになりました。

3年生になって、大辻清司先生に出会いました。桑沢に牛腸茂雄さんたちが入学してきて、写真研究室の助手になっていた私はそのクラスの授業を後ろから眺めているという感じでしたが、先生と学生の話し合いやトークが全然なくて、みんな黙っているんです。先生も黙っているし、誰かがぼつりと言うことに、ぼそぼそと答えるというような授業でしたが、みんな一所懸命先生の話を聞いていました。議論するということではなくて、みんな受け入れるんですね。コンボラ写真の時代の人たちは、同じような傾向の写真、横位置で、人間が小さく真ん中に入っている、そういう写真が多かったのですが、一人一人の作品に、その人の写真の良さを見つけて、丁寧に話されていたのは覚えています。先生の家が代々木上原にあったので、そこに在校生も卒業生たちもみんな集まって来ました。押し入れの中に先生が作った鉄道模型のジオラマを見たり、ロバート・フランクの写真集を先生が持ってらして、それをみんなで夢中になって見たというのは覚えていますね。そこで何を学んだかというのは、記憶にないんです。でも何か、いつの間にか染みついていく。私も卒業してから時々先生のところに行ったりしましたが、

写真との出会い

大辻先生から学んだこととは？

- 1940 東京都生まれ
- 1963 桑沢デザイン研究所リビングデザイン研究科写真専攻卒業
- 個展
- 1976 「微笑みの手錠」新宿ニコンサロン（東京）
- 1989 「生活」Film Round Gallery（東京）
- 1992 「冷蔵庫／ICE BOX」Galleryさくら組（東京）
「冷蔵庫／ICE BOX」東京デザインセンター（東京）
- 1994 「帽子」Gallery MOLE（東京）
- 1998 「冷蔵庫／ICE BOX」三菱地所アルティアム（福岡）
- 1999 「冷蔵庫／ICE BOX」世田谷区文化生活情報センター生活工房（東京）
- 2001 「帽子」Contemporary Photo Gallery（東京）
- 2002 「聖歌」Contemporary Photo Gallery（東京）
- 2003 「本の景色／BIBLIOTHECA」第5回図書館総合展東京国際フォーラム（東京）
「Bibliotheca 本の景色」Contemporary Photo Gallery（東京）
「Bibliotheca 本の景色」早稲田大学図書館（東京）
- 2004 「Bibliotheca“Bookmart”」Contemporary Photo Gallery（東京）
- 2006 「Bibliotheca 本の景色」明治学院大学インブリー館（東京）
- 2008 「冷蔵庫／ICE BOX」Port Gallery T（大阪）
- 2009 「冷蔵庫／ICE BOX」CAFÉ UNIZON（沖縄）
- 2010 「本の景色／BIBLIOTHECA」森岡書店（東京）
- 2012 「Bibliotheca 本の景色」Port Gallery T（大阪）
- 2017 「本の景色／BIBLIOTHECA」ギャルリ 412（東京）
「本の景色／BIBLIOTHECA」PGI（東京）
- 2018 「土門拳賞受賞作品展 本の景色／BIBLIOTHECA」ニコンプラザ・The Gallery（新宿、大阪）
- 2022 「マイハズバンド／My Husband」PGI（東京）

- グループ展
- 1981 「人和人民公社」OWL（東京）
- 1982 「China Life Report」ポラロイドギャラリー（東京）
- 1989 「六・非・表現主義」FROG（東京）
- 1995 「写真都市／TOKYO」東京都写真美術館（東京）
- 2004 「まほちゃんち」水戸芸術館現代美術ギャラリー（茨城）
- 2008 「China／Biblioteca／Manga」Lee Ka-sing Gallery（トロント、カナダ）
- 2012 「Reinventing Tokyo」Mead Art Museum, Amherst College（アマースト、アメリカ）
- 2015 「加地邸をひらく 2015 春－暮らしの記憶」加地邸（神奈川）
- 2016 「Dislocations」smith College Museum of Art（ノースハンプトン、アメリカ）
- 2018 「流動的宴席」西安市城市記憶博物館（中国）
「日本写真協会賞受賞作品展」富士フィルムフォトサロン（東京）
「東川賞受賞作品展」東川町文化ギャラリー（北海道）
- 2019 「アカルイ カテイ」広島市現代美術館（広島）
- 2021 「アネケ・ヒーマン&クミ・ヒロイ、潮田登久子、片山真理、春木麻衣子、細倉真弓、そして、あなたの視点」資生堂ギャラリー（東京）

- 受賞
- 2018 第37回土門拳賞、日本写真協会賞作家賞、第34回写真の町東川賞国内作家賞
- 2019 桑沢特別賞
- 2022 「Paris Photo–Aperture PhotoBook Awards」審査員特別賞

- 写真集
- 1996 『冷蔵庫／ICE BOX』Beebooks（光村印刷株式会社）
- 2004 『HATS』パロル舎
- 2016 『みずず書房旧社屋』幻戯書房
- 2017 『先生のアトリエ』幻戯書房
- 2017 『本の景色 BIBLIOTHECA』幻戯書房
- 2022 『マイハズバンド』torch press

- コレクション
- Smith College Museum of Art（ノースハンプトン、アメリカ）
- Mead Art Museum（アマースト、アメリカ）
- 九州産業大学（福岡）
- 東京国立近代美術館（東京）

- 展覧会
- 学芸担当：佐藤直子、沼田英子、日比谷安希子
- デザイン：須山悠里
- インタビュー映像撮影・編集：西野正将
- CM映像制作：城西国際大学メディア学部クロスメディアコース

- パンフレット
- 写真：潮田登久子
- 執筆：潮田登久子、光田ゆり
- 作家インタビュー構成・編集：佐藤直子
- 翻訳：ヒントン実結枝

- デザイン：須山悠里
- 印刷・製本：株式会社ライブアートブックス

- 編集・発行：横浜市民ギャラリーあざみ野
- [公益財団法人横浜市芸術文化振興財団]
- 〒225-0012 横浜市青葉区あざみ野南1-17-3
- Tel. 045-910-5656 Fax. 045-910-5674
- 発行日：2023年1月28日

- © 2023
- 横浜市民ギャラリーあざみ野
- 出品作家／著者
- [禁無断転載]

- Exhibition
- Curators: Sato Naoko, Numata Hideko, Hibiya Akiko
- Designer: Suyama Yuri
- Filmed and Edited of Artist Interview by: Nishino Masanobu
- Promotional Video by: Faculty of Media Studies, Josai International University

- Pamphlet
- Photo: Ushioda Tokuko
- Contributors of Texts: Ushioda Tokuko, Mutsuda Yuri
- Artist Interview Text Editing: Sato Naoko
- Translation: Hinton Miyuki
- Design: Suyama Yuri
- Printed by: LIVE ART BOOKS Inc.
- Edited and Published by: Yokohama Civic Art Gallery Azamino (Yokohama Arts Foundation)

- ©2023 Yokohama Civic Art Gallery Azamino
- ©2023 The Artist and the Author
- All rights reserved.

